



Japan Society of
Youth and Adolescent Psychology

Newsletter

第 76 号 2018 年 10 月 16 日
発行：日本青年心理学会事務局

■目次

＜特集：青年と部活動・サークル活動＞

榎本淳子：テニス三昧・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
中谷陽輔：部活動・サークル活動は、現代青年の「居場所」となりえるのか・・・	2
久保田（河本）愛子：部活動が私に見せてくれたもの・・・・・・・・・・	3
吉村 斉：人生の転機と部活動・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3
茂木昌克：高校・大学の課外活動におけるボランティア活動・・・・・・・・	4
葉山大地：サークル活動とまとまる力・・・・・・・・・・・・・・・・・・	5
二宮克美：音楽演奏の魅力・・・・・・・・・・・・・・・・・・	5

＜書評＞

山田剛史：『レクチャー 青年心理学：学んでほしい・教えてほしい青年心理学の 15 のテーマ』高坂康雅・池田幸恭・三好昭子（編著）風間書房（2017 年刊）・・・・・・・・	6
---	---

＜書評：私のおすすめ、この 1 冊＞

坂井敬子：『偏見や差別はなぜ起こる？：心理メカニズムの解明と現象の分析』北村英哉・唐沢 穰（編）ちとせプレス（2018 年刊）・・・・・・・・	7
---	---

＜広報＞

広報・ニューズレター編集委員会からのお知らせ・・・・・・・・・・	7
研究委員会からのお知らせ・・・・・・・・・・・・・・・・・・	8
事務局からのお知らせ・・・・・・・・・・・・・・・・・・	9

＜特集＞ 青年と部活動・サークル活動

現在、日本の部活動のあり方に注目が集まっています。考えてみると青年によっては部活動・サークル活動に大変なエネルギーを注いでおり、だからこそ、そこから青年の学びや成長につながることも多いのではないかと思います。そこで第 76 号ではご自身が部員・サークルの一員だった頃を振り返っての体験談、または部の顧問（部長）・指導者としての体験談、あるいは課外活動に関する研究の観点などから、青年と部活動・サークル活動について論じていただきました。また部活動のご研究をされている久保田（河本）愛子先生（非会員）にもご寄稿をお願いしました。多様な観点からのご寄稿、そして画像のご提供もありがとうございました。

今回、広報・ニューズレター編集委員会宛に初のご投稿もいただきました。電子版となったニューズレターの今後の展開に、ぜひ積極的にご参加ください。ニューズレターは会員内外の交流の場として、また社会への発信の場として、皆様にとってより身近な存在に進化していきます。詳細は、7 ページ「広報・ニューズレター編集委員会からのお知らせ」をご参照ください。

（特集担当：三好昭子・半澤礼之）

テニス三昧

榎本淳子（東洋大学）

なぜあんなにテニスばかりしていたのだろうかと思うほどに、中学校、高校（共に部活動）、大学（サークル）とテニスに集中していた。大学時代は大学にいた時間より、テニスコートにいた時間の方が遥かに長いと思う。「勝つためのテニス」だったので、テニスコートの種類によってシューズを履き替え、季節ごとにガットのポンド数を替え、真剣にやっていた。しかし 10 年間のテニス経験と上達はあまり比例せず、悔しい思い出の方が多い。

部活動がなければ今の私は随分と異なっていたのではないかと、それは大袈裟かもしれないけれども、そう思わなくもない。特に高校時代はひたすら走り、腹筋、背筋、腕立て、手押し車とお決まりのセットを繰り返しやっていた。あれ以降、やったことはない。今の私の体力のほとんどはあの時に作られたものだと思う（すでに枯渇したと思われるが）。自由な校風のもと、コーチや顧問のような大人の存在がいなかったので、練習メニューの設定から、試合に出るメンバーの選定まで、部活動の仲間と話し合いで決めていた。ちょうどマクドナルドのサンキューセット（ハンバーガー、ポテト S、ドリンク S のセットで 390 円）が出ていた頃で、それを食べながらよく話し合った。私は初めて、人の意見はこんなにも異なるのだと新鮮に驚き、思うようにはならないと落胆した。折り合いをどうつけるのか、客観的に成れない頭をフル回転させていたことは今もはっきりと思い出せる。大揉めになっても最後は皆が妥協して結論を出し、また再び一緒に練習をした。なかなかできる経験ではない。おそらく大人のいない仲間だけの集団だったからできた経験だろう。自分たちで決めるしかなく、決めたことは皆が守ろうとしていた。そういう意味では部活動の経験は集団の形態によって違ってくるように思う。

テニスばかりの 10 年間を過ごし、私はその後大学院に進学し、テニスをあっさりやめた。さすがに「勉強しよう」と思った。勉強しようと思ったことも、そして最近、「またテニスをやりたい」と思うことも、部活動をやっていたよかったと思うことのひとつと感じる。

部活動・サークル活動は、現代青年の「居場所」となりえるのか

中谷陽輔（同志社大学）

私にとっての部活動・サークル活動はどのようなものだったか思い返すと、正直なところそんな華々しいエピソードは出てきません。しかし一人の青年としては、試行錯誤しつつ自分なりの選択をし、最終的にある程度満足しているという意味で、良い経験だったのかもしれないと思っています。

中学時代は、某マンガの影響でバスケットボール部に入部するものの、部内のレギュラー争いに全く関われない日々でした。加えて中 2 の終わり頃、練習中に左足首の靱帯を損傷し、松葉杖生活のまま引退を迎えました。高校時代は、自分の身体を鍛え直したいと空手部に入るものの、人間関係の軋轢から高 1 途中で退部。それから 1 年ほど放課後のゲームセンター通いを続けましたが、高 2 の秋に一念発起して柔道部に入部しました。高校は白帯のまま卒業しましたが、大学で柔道サークルに入り、黒帯をとることができました。そして高校時代の柔道部仲間とは、約 20 年経過した今でも年に数回集まって飲んだり遊んだりする仲間となっており、自分の「居場所」の一つとなっています。

こんなふうに自分の部活動・サークル活動を思い返すと、同じ活動を継続して仲間やライバルと切磋琢磨する人もいれば、私のように紆余曲折する人もいたっていいのかも、なんて自己弁護的に考えたりします。

最近、ブラック企業やブラックバイトなどとともに、“ブラック部活動”（内田, 2017）という言葉がにわかに話題になっています。そこで明らかになってきたのは、部活動は「教育活動外の付加的活動」であるがゆえに明確な規定がなく、本来は自主的な活動で

あるはずの部活動が、成果を出すため土日休みなく拘束されるなど、子どもにとっても教員にとっても「強制性」を伴いやすいという実態です。内田（2017）は、学校での部活動の存在意義は学業以外の活動の機会保障であるとした上で、一定の「競争」の論理は認めつつ、「居場所」の論理をより優先させるべきだと説きます。

効率・結果・スピードが求められやすい現代社会においては、青年が自由な試行錯誤を行うことのできる機会や、教育評価にとられない居場所は、得難くなってきていると思います。大人の役割として、そういった機会や居場所を現代青年にどのように保障するのか、もしくは今はそんな時代ではないと一蹴するのか、試されているのかもしれませんが。

ただ少なくとも私は、自分の経験から、損得抜きにお酒を酌み交わせる仲間の存在は貴重だなあと、お盆と正月を迎えるたびに思うのです。

【引用文献】

[内田 良（2017）.ブラック部活動——子どもと先生の苦しみに向き合う—— 東洋館.](#)

部活動が私に見せてくれたもの

久保田（河本）愛子（宇都宮大学）

私が高校でフィールドワークを行っていた頃、生徒たちはよく、部活動での体験を生き生きと語ったものだった。それだけ部活動は、彼らにとって魅力的なものらしい。もっとも、自分の過去を振り返ってみても、部活動は私の学校生活の重要な位置を占めていた。

私は、中学では吹奏楽部、高校では合唱部と、音楽系の部活動に所属していた。いずれも全国大会に出場するような華々しい実績をもつような部活ではなく、人数も多くはなかったが、それでも、部活動は当時の自分に見えていなかったものを様々に見せてくれた。

部活動のメンバーは、ある種の運命共同体だ。コンクールや演奏会の結果は部員全員に関係してくる。うまくいけば皆で喜びを分かち合い、失敗があれば皆でがっかりし時に涙する。これが勉強なら、テストで良い点をとっても悪い点をとっても、一体となって感情を分かち合うことはできない。部活動で仲間と気持ちを共有した体験は、集団内で感情が伝染し合う不思議を私に見せてくれた。

運営を成り立たせる裏に、誰かの努力や苦労があることを見せてくれたのも部活動だった。仲間が練習計画を練ったり、練習方法を考えたりする姿を見て、当時、部長でなかった自分でさえ、何かの活動を運営するときには、その裏に誰かの働きがあることを感じたものだった。

部活動に入らなければ、当時見えなかったものは今でも見えないままだったかもしれない。しかし、部活動を通して見えてきたことは、その後のどういった生活場面で、意味をもっていたのだろうか。また、どういった部活動の運営を行えば、より多くの生徒に意味をもたらすことができるのだろうか。部活動の発達上の意味やメカニズムについては、研究レベルで、未だよくわかっていないのが現状であろう。部活動の在り方について論じるのであれば、それが長い目で見たときにもつ意味と、なぜその体験が有意義なものになるのか、その核となる要素を考究する姿勢を忘れずにいたい。

人生の転機と部活動

吉村 斉（高知学園短期大学）

青年期をふり返ると、部活動を思い出す人は多いと思われる。大学までバスケットボールに励んだ筆者もその1人である。また、顧問として部活動に関わった経験では、1人の女子学生が印象に残っている。彼女は学習内容と進路に悩み、退学も視野に入れて

いた。不安を抱える中、彼女は学校を代表して大会に出場した。全力でプレーし、また周囲の激励と応援を受けることで、次第に学校に対する所属感を高めていった。その結果、目の前の課題と向き合い、将来の目標を定めて勉学に励み、国家試験を突破したのである。彼女にとって、部活動は人生を変える転機になったと思われる。

筆者にとっても、部活動は社会に必要な基礎の多くを学んだ場所であった。多様な分野の仲間と活動した経験は今も財産となっている。特に思い出されるのは、意見が対立した後に高校時代はラーメン屋、大学時代は居酒屋へよく行ったことである。もっとも「食べたい、飲みたい」の理由で集まったにすぎない。それでも、お互いを理解しあい、多角的な視点で考える貴重な機会となった。そこには常に安心でき、支えあっている雰囲気があった。おそらく、その集まりを提案した主将たちが状況を判断して主体的に行動してくれたのだろう。以上の経験は、筆者が主将のリーダーシップに焦点を当てた研究を進める契機となった。

その後、顧問教師を含めた管理についても調べた。とりわけ、ルール順守は重要な要因の一つと推察している。ただし、筆者の研究では管理行動の適度な水準を解明するには至っていない。近年、体罰やパワハラが注目される問題も発生した。そこには管理の適度さが問われている。

部活動は人を育てる活動である。しかし、その位置づけには曖昧さも残されている。顧問が教科担当教師でよいか、活動は発達に適しているか、部活動の効果は他の活動で得られないのかなど、多くの課題が浮上する。理想論だけでは解決しない問題である。だからこそ、部活動を学校単位で行うのであれば、教育目的や実施制度を明確に定め、誰もが安心できる環境構築が望まれる。

高校・大学の課外活動におけるボランティア活動

茂木昌克（エンカレッジスクール市民講師）

筆者は都立高校のエンカレッジスクールで市民講師として授業を担当している。この他、ボランティアコーディネーターや大学ボランティアセンターの設立も経験している。これらのことから、部活やサークルとしてのボランティア活動について、成長や学びを見ていくことにする。

ボランティア活動とは何かと言うと、社会をより良くするための取り組みである。これは、高校の教科「奉仕」のテキストにも記載されている。青年期の発達過程において、社会とのかかわりはアイデンティティの確立にあたりとても重要である。この中で、ボランティア活動も一つの方法であり、社会課題の発見と、解決に向けた取り組みの中で己の役割を見つける過程は、青年にとっても学びがあり青年の成長を促すという意義があると考えられる。

その上で、高校のボランティア部と大学のボランティアサークルについて言及する。結論から言うと、高校のボランティア部は顧問の先生の指示に基づき、決められた活動を行うだけのところが多い。大学のボランティアサークルの大部分は人手として福祉施設で働いているだけの状態である。これは決して望ましい形ではない。高校生も大学生も、ボランティアについての知識がないことを前提として情報を十分に与え、施設等の対象者が何に喜ぶか、自分たちには何ができて、何をしたら良いのか。じっくりと調べて考え、その上で実践していくことが望ましい。要は、福祉施設の慰問だけがボランティア活動ではないのである。

以上のように、課外活動としてのボランティア活動は、顧問の先生もまたボランティアについての知識不足という点を指摘せざるを得ない。このままでは、初めてボランティア活動に触れた生徒・学生が、ボランティア活動について誤解したまま、興味が持てず関心を失ってしまう可能性がある。つまり、社会課題の発見と解決に向けた取り組みの中で己の役割を見つける過程で得られる成長や学びにつながらなくなってしまう。筆者は、ボランティア活動と称して青年に単純な労働力としてお手伝いをさせる風潮の改善を熱望している。

サークル活動とまとまる力

葉山大地（中央学院大学）

部活動やサークル活動は、技術向上や知識獲得だけでなく人間関係の機微を学ぶことができるため、学校生活での体験をより厚みのあるものにします。特に、共通の目標を目指して力を合わせる体験は、様々な場面で他者と協働していく態度の伸長につながります。

私は中学生の時は卓球部に属し、高校生の時は山岳部に属していました。卓球部は2歳年上の兄が入部していたという理由で、山岳部は授業で歴史の先生が山の魅力を熱く語っていて友達となんとか入ったのがきっかけでした。どちらも副部長を務めました。今思うと私は自分からグループに発言する方ではなく、黙々と従うほうだったので自分に向いているポジションだったと思います。リーダーに向かないのは今も変わりません。

大学では部活やサークルには入っていませんでしたが、現在は教職課程の教員をしている関係で、教育研究会というサークルの顧問をしています。3年前、教員志望の学生が立ち上げたサークルで、学習指導案の作成・講評や模擬授業の実施などを学生有志で行うというのが活動内容です。約1年で20名ほどまで規模が拡大し、一時期は40名ほどが参加していました。学生の溢れんばかりのエネルギーと勢いに圧倒されつつ、顧問として楽しみながら関わっています。

その一方で、大人数になってくると足並みが揃いづらいこともあり、安定した活動を行うことが難しいとサークルのリーダーから相談を受けることが時々あります。自由に参加できるのがサークルの良さですが、集団としてまとまる体験も重ねてもらいたいと顧問としては悩ましく思うこともあります。

集団としてまとまるということを考える場合、バイトを減らすなど自分の生活をサークルに合わせることや、他の学生と意見の折り合いをつける必要が出てきます。そのためには集団として十分に話し合うことも不可欠です。その意味では、個々の学生の精神的な成熟だけでなく集団としての成熟も関係してくると思います。スマートフォン等の普及で、SNS上で情報交換を簡単に済ませることも可能になっている分、実際に集まって生の声を交わせる場を作ることも顧問の役割と考えています。今後も学生たちと一喜一憂しながら、サークル活動を支えていく所存です。

音楽演奏の魅力

二宮克美（愛知学院大学）

部活動に参加したのは、50年以上前の中学1年の時です。吹奏楽部に入部し、トランペットを演奏することになりました。うまくなりたい一心で、日曜日も学校に行って、練習をしていました。高校でも吹奏楽部に在籍し、大学に入ってから交響楽団（オーケストラ）に入部しました。学生たちだけで、クラシックの曲目を生で演奏している様子に驚きと同時に新鮮さを感じました。入部してすぐの6月の演奏会で、チャイコフスキーの「スラブ行進曲」を演奏したことを鮮明に覚えています。ひな壇の一番上の中央に位置する場所（当時はここがトランペットの演奏場所）に座っていました。まさに演奏がもりあがる時に、トランペットの出番でした。2年からは学生指揮者も経験し、スコア・リーディングのみならず指揮棒の振り方、練習時に各楽器奏者への演奏の指示なども学びました。大学院修士課程まで在籍していました。

現在の大学に奉職し、在外研究（U. C. Berkeley）を終えて戻ってきたとき、学生数人の熱意により、吹奏楽団の立ち上げに関わりました。楽器が何もない、人数も8人という状態から始めました。その後、クラブの顧問・指揮者として25年間演奏活動に関わ

ってきました。現在は団員数約 70 名にもなる大きなクラブとして成長しました。吹奏楽団ゆえに、野球部の応援がつきものです。附属の愛知高校が甲子園に出場した時には甲子園球場で、大学野球（特に最近では、西武の源田選手が在籍するとき）では神宮球場で、演奏した思い出が自慢です。現在も年 1 回の定期演奏会に指揮者として出演しています。アマチュアの演奏家として 50 年以上が立ちました。

吹奏楽団やオーケストラは、多くの人数が同時に協力しあって、音楽を作り出すことが求められます。他の演奏している人の音を聴いて、自分の演奏する音を合わせる作業が、とても大切です。「思いやり」の心理が実践されている場でもあります。

青年に限らず、一生の趣味として音楽の演奏活動に関わるのは、とても贅沢なことです。



<書評>

『レクチャー 青年心理学：学んでほしい・教えてほしい青年心理学の 15 のテーマ』

高坂康雅・池田幸恭・三好昭子（編著）

風間書房（2017 年刊）

山田剛史（京都大学）

本書は、新しいスタイルの青年心理学のテキストである。青年心理学の第一の当事者である青年自身はもちろん、青年心理学を教える教員にも焦点を当てている点が最大の特長である。そのコンセプトが次の 3 つの「しかけ」として具現化されている。1 つ目は、授業での使いやすさを考慮し、15 章立てにしている点。網羅的かつ体系的で、全てを取り上げても部分的に扱っても大丈夫な内容・構成になっている。図表が多く掲載されている点も有り難い。2 つ目は、各章に、様々な場面で活用可能な「小レポート課題」や「ディスカッション・テーマ」について例示されている点。昨今の教育改革の動向も鑑み、アクティブラーニングを促すことも視野に入れている。3 つ目は、各章のトピックに対応する形で多くのデータや尺度が掲載されている点。自己理解を促すという役割のみならず、学生が研究を行う上での有用性も高いものになっている。

本書を通読して、改めて、青年心理学は「おいしい」学問だと感じた。それは、青年心理学が、一定の普遍性を担保としながら、社会・文化・歴史的な背景によって相対的に位置づけられる可変性をも有しているからである。そうであれば、テーマはいくらでも出てくるし、青年心理学のテキストの在り方も多様たり得る。例えば、「地域で育つ青年」（第 11 章）といったテーマは、従来のテキストにはあまり出てこなかった、しかしながら現代的で重要なものである。欲を言えば、各学校段階における教授・学習といった文脈に即したテーマ、発達障害や精神障害等の臨床的なテーマ、社会の変化と連動

したトランジションに関するテーマなど、応用的なものについても取り上げられると、異なる分野の研究者・実践者への拡がりや今後の研究の発展にもつながるのではないだろうか。

最後に、本書に込められたもう一つの重要な意義は、私たち青年心理学者のアイデンティティを前向きに問い直そうという点にある。本書が、多くの読者に恵まれ、様々な議論につながることを期待したい。

<書評：私のおすすめ、この1冊>

『偏見や差別はなぜ起こる？：心理メカニズムの解明と現象の分析』

北村英哉・唐沢 穂（編）
ちとせプレス（2018 年刊）

坂井敬子（和光大学）

本書は、偏見・差別分野における社会心理学の膨大な知見を13名の執筆者が詳しく解説したものである。第Ⅰ部「偏見・差別の仕組み」は理論編で、偏見や差別のメカニズムを詳細に記述する。第Ⅱ部「偏見・差別の実態と解析」は現象の分析編で、人種・民族、移民、障害、ジェンダー、セクシュアリティ、リスク・原発、高齢者、犯罪の8トピックを扱う。

偏見や差別を説明する基本的概念にはステレオタイプや集団間バイアスがあるが、他にも目を惹かれる理論や概念が紹介される。例えば、人は分相応のものを持つのだと信じる「公正世界信念」や、現状の社会システムをそれが存在しているという理由だけで正当化しようとする「システム正当化動機」がある。これらにより恵まれない集団の成員は不協和を感じるが、その恵まれなさを自己の特徴でなく所属集団の特性として理解したり、「有能だが冷たい／有能でないが温かい」といった相補的ステレオタイプを受け容れて、不協和は低減される。そして如何せん、ステレオタイプは保持される。

また、偏見や差別の解消（と限界）についても随所でかなりの記述がある。偏見に問題意識を持つことや、一定の条件を備えた上で集団の垣根を超えた親密な接触が行われることは有効であるという。意識の問題ではなく制度の必要性も説かれる。例えば、積極的格差是正措置（affirmative action）の導入である。これは、先に示したシステム正当化動機によりステレオタイプを解消するという利点がある。

他には、「何をもって偏見とするのか」、研究者自身が持ちうるバイアスについても指摘があり、広い角度から考えさせられる。

奇しくも本書の発刊と時を一にして、国会議員の生産性発言や医大の一般入試における得点操作が報道された。目眩や絶望すら覚えた人もいるだろうが、本書は希望を与えてくれるように思われる。

<広報>

広報・ニューズレター編集委員会からのお知らせ

第72号より、会員の皆様から意見や要望を募るとともに、自由な投稿・寄稿を促すことにしたとアナウンスさせていただきました。投稿・寄稿ルールについて、再度簡単に説明させていただきます。

●会員から募集するのは、以下の5つです。

①特集テーマに取り上げて欲しいトピックス 「特集テーマ提案」

随時募集。過去のNL記事を振り返りつつ、編集委員会で検討し決定します。

- ②書評に取り上げて欲しい書籍 「書評推薦図書」
随時募集。原則として最新号発行 1 ヶ月前に集約し掲載します。
 - ③書評執筆の希望 「書評執筆希望」
掲載書籍への書評執筆の希望者を、原則として最新号発行後 1 ヶ月間募集します。
該当書籍をお持ちでない場合には献本いたします。
 - ④次号の特集テーマに関する投稿の申し込み 「特集テーマ投稿希望」
特集テーマへの投稿希望者は、原則として最新号発行後 1 ヶ月間募集します。
 - ⑤会員からの情報や意見の自由投稿 「投稿：会員から」
随時募集。投稿内容が本学会の NL の記事に相応しいかを編集委員会で検討し、掲載の可否を決めます。不掲載の場合は、投稿者に理由を開示します。
- 投稿・寄稿時には、必ず件名を「」内の通りとし、本文の最初にお名前と所属・連絡先メールアドレスをお書きください。
 - 書評および特集テーマへの執筆候補者は基本的に以下のように決定します。なるべく執筆希望者を優先しますが、編集委員会において会員の先生方の専門や経歴のほか、最近の寄稿状況を把握し検討したうえで執筆候補者を絞り込み、改めて執筆を依頼します。
 - すべての投稿先は、jsyap-nec@googlegroups.com（日本青年心理学会 広報・ニュースレター編集委員会）です。
 - 原稿の字数は 800 字程度を原則としますが、電子版なので柔軟に対応いたします。
 - 書評推薦図書として『[多様化する「キャリア」をめぐる心理臨床からのアプローチ：青年期から老年期までのケースに学ぶ](#)』長尾 博（編著）ミネルヴァ書房（2017 年刊）があがっています。書評を書いてみたい方は③の「書評執筆希望」でご応募ください。
 - 第 77 号の特集テーマは「[日本青年心理学会第 26 回大会](#)」です。大会に参加された会員の皆様に、忌憚のない意見や感想、コメントなどをご寄稿いただけると幸甚です。投稿希望のお申し出締め切りは、11 月末日です。

研究委員会からのお知らせ

I. 日本青年心理学会第 26 回大会における研究委員会企画シンポジウムのお知らせ

研究委員会では日本青年心理学会第 26 回大会の 2 日目の 10 月 28 日（日）に、“発達障害を有する青年の成人期への移行に関する研究展望”という主題でシンポジウムを開催いたします。

2016 年 4 月に障害者差別解消法が施行され、障害を有する学生への合理的配慮の提供が義務化（国公立大学では法的義務、私立大学では努力義務）されました。このような社会的動向は大学教育においても注目されており、2019 年に法律の見直しが予定される中で、青年心理学にとっても重要な課題であると考えられます。

本シンポジウムでは、発達障害を有する青年の成人期への移行に関する文献を概観し、実践活動の成果も踏まえて、「今どこまでわかっており、青年心理学にとって何が課題であるか」という青年心理学研究についての課題と展望を検討します。研究委員会による発達障害を有する青年の成人期への移行に関連する文献を概観した成果について、大谷宗啓委員（滋賀大学）が話題提供を行います。そして、村山光子氏（明星学苑）からは豊富な実践経験に基づき、青年期や成人期における社会移行支援の課題と実際について話題提供いただきます。それを受けて田澤実会員（法政大学）からは、発達障害を有する青年の就職支援やキャリア形成を中心にした観点から、指定討論をしていただきます。

青年期から成人期への移行の多様性を理解するために、青年の発達の個別性と可塑性を踏まえて、これからの青年心理学研究に貢献できるような発展的な議論をしていきたいと考えております。皆さまに、ぜひご参加いただけますと幸いです。
注) 本稿では、法令等に則り「障害」という表記で統一しました。

標 題：発達障害を有する青年の成人期への移行に関する研究展望
企 画 者：日本青年心理学会研究委員会
話題提供者：大谷宗啓（滋賀大学）
話題提供者：村山光子（明星学苑）
指定討論者：田澤 実（法政大学）
司 会：池田幸恭（和洋女子大学）
日 時：2018 年 10 月 28 日（日）15：20-17：00（大会 2 日目）
会 場：京都大学 吉田キャンパス吉田南構内 1 共 31 教室

研究委員会委員長 池田幸恭（和洋女子大学）

事務局からのお知らせ

I. 学会メーリングリストをご利用ください

現在、電子版ニューズレターや大会・研究会などの案内を、学会メーリングリストによって配信しています。会員であれば、青年心理学に関する研究会や講演会・シンポジウムなどの案内を、このメーリングリストを用いておこなうことができます。セキュリティの関係上、事務局からのみの発信となりますが、どうぞご利用ください。

日本青年心理学会事務局
The Japan Society of Youth and Adolescent Psychology
〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町
TEL：075-753-3047
E-mail：seinenshinri@gmail.com
Website：<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsyap/>
振替口座：00940-6-273417
口座名称：日本青年心理学会

お問合せはできるだけ E-mail でお願いいたします。